

AP 日本語がもたらす中等日本語教育と大学の日本語教育のつなぎの問題
AP Japanese: New Articulation Issues between Secondary and
Post-secondary Japanese Education

グラハム智子(ノーブル・グリノー 高校)
Tomoko Graham (Noble and Greenough School)

I. 問題提議

2006年秋から全米の高校で AP 日本語コースが新設された。現在約 400 校で AP 日本語が教えられており、2008 年の試験結果報告によると、AP 日本語試験の受験者 1538 名のうち 890 名(58%)が日本語を母語、継承語としない学習者で、そのうち 66.2%が5段階評価で3以上の合格点を取得している。この試験に合格すると、大学に入ってから、1年、2年レベルの日本語をスキップして、上級日本語コースに登録が許されたり、2年目までのコースに相当する単位修得が認められると言う。しかし、実際に大学側は AP 日本語で育ってきた学習者をどのように受け入れているのだろうか。高校から大学の2年目、3年目の日本語コースに跳び級する学習者の日本語、日本文化の知識とスキルは、実際大学側が期待するものであるのか、そのズレはどこに存在するか、それを克服するために、高校、大学のカリキュラムにそれぞれどのような変革が必要であるか等を考察する。

II. 考察

まず、実際に 2007-8 年に AP 日本語コースを履修し、AP 日本語試験を受けた卒業生にインタビューを試みた。コルゲート大学の一年目を終えた A さんは、去年の AP 試験で3をとった。大変まじめに勉強するタイプで、日本語のクラスでは中高の6年間、成績は一貫して A であった。大学では2年目一学期のコースに編入した。はじめは、クラスの雰囲気にとまどいとストレスを感じたが、授業内容とペースは AP 日本語とだいたい同じだったと語った。漢字は知っていても書くのに苦労したという。B さんは、AP 試験で4をとり、UC Santa Cruz の2年目に編入した。先生の日本語と授業のスピードの速さに圧倒されたが、自分の日本語力、漢字力、また勉強のコツ(study-habits)を身につけているということに自信もあって、無事に一年目を終えた。C さんは韓国人留学生で高校でも跳び級をして、高校2年で AP 試験を受けて5をとった。ジョージタウン大学の3年目に編入。ペースが速く、読み教材中心の授業と、自分の発話力の不足と導入漢字の量に苦労したという。この3人の感想から共通してわかったことは、大学では学習者に自立的な勉強を期待すること(例えば、単語クイズが練習に先行すること、また先生が手取り足取り助けてくれないこと)、単語、文法、漢字の習得を重視していること、言語能力的にはプレースメントを適切だと受けとめているが、漢字力、単語力、発話力など、生徒それぞれの持つ弱点が継続して足を引いていること、そして、コース運営や先生のティーチングアプローチ、テスト形式、クラス環境を把握しないまま、授業に突入して苦労することなどであった。

AP 日本語コースは、大学レベルの授業を行なうということを前提としている。従って、AP 日本語コースで使う教科書は、大学の日本語コース2年目で使う教科書(「ようこそ」、「なにかま」、「げんき」等の vol. 2)を選ぶことが多い。しかし、同じ教科書を使っているが、カリキュラムの中での使い方は大きく異なる。筆者は、大学で 14 年間、高校で 11 年間、日本語を教えた経験を持つ。大学の始めの2年間の授業の進め方は、ボトムアップ式、スキルベースの場合が多く、文法と

単語の習得を目的とした言語活動が主であろう。これに対し、AP 日本語では、言語知識とスキルを教えるだけでなく、スタンダードに基づいたトップダウンアプローチの言語活動を組み入れることによって更に深い内容理解に迫ろうとする。日本文化と自分の文化を比較する、日本文化への考察を計る、自分の意見をまとめて論理的に書いたり話したりする、という言語活動を繰り返し行う。つまり、インターパーソナル、インタープリティブ、プレゼンテーションモードのコミュニケーション活動を循環的に行なう(Cyclical Approach: ACTFL, 2003)。また、スタンダードの5Csと内容重視のカリキュラムを実現するために、シマティックユニット型の総合学習を行なう。各課のコンテンツに合わせてテーマとタスクを決め、一連のコミュニケーション活動を行なう。例えば、なかま2の5課「私の将来、じゅんぴ」では、次のようなシマティックユニットで、生徒に自己分析と将来への希望を表現させる。

1. 国際文化フォーラム「伝えたい私たちの素顔」 <http://www.tjf.or.jp/thewayweare/> に描かれている高校生について調べる。日本人の高校生がどんなことを考えているか、将来何をしたいか、そのために今何をしているか、等を写真を見せながらクラスで発表。
2. 「すばらしい友達」のフォトエッセイ作り:二人ずつのチームでクラス外の共通の友人にインタビューをしてその生徒のプロフィールを日本語で作成する:その生徒の学校での表情を写真4枚に撮る:写真から解るその人の性格、熱中していること、とりまく環境、将来の夢などについて写真ごとに標題を書く(小冊子にまとめる): 2つのチームで集まって小冊子を見せながらそれぞれの友人について紹介し合う。交代して、別のチームと話し合う。
3. アセスメント— **timed-writing**:「私の将来」というタイトルで、自分がこのごろよく考えること、将来の希望、そのために今していること、等について 350 字のエッセイを書く。

シマティックユニット型の総合学習のもう一つの特徴は、オーセンティックな教材を使ってオーセンティックなタスクを行なうということ。生きた言語活動を通して、多量の語彙、豊かな表現を身につける、考える力を伸ばす、自己発見、自分の文化や社会への理解を深める、といった高い次元での育成が可能となる。また、日本語を多く聴かせ、読ませることで、聴解ストラテジーや読解ストラテジーを身につけさせる。410 字の AP 漢字を修得するための学習ストラテジー、また言い回しや限られた語彙でなるべく多くを表現するなどのコミュニケーションストラテジーのトレーニングもする。しかし、このような訓練を通して AP 日本語試験に合格しても、大学の日本語コースに編入後は、今までの学習成果があまり評価されず、継続性のない学習に新たに順応しなければならないという現状の問題は大きい。

III. 今後の課題

中等日本語教育で AP 日本語を最終ゴールとしてカリキュラムの変革がどんどん進められているなか、大学の日本語教育とのつなぎの問題が今後ますます深刻になっていくであろう。これに対処するために、AP 日本語プログラムで育った高校卒業生が、大学の日本語コースにスムーズに編入できるような工夫が必要である。そのために、高校生を大学へ授業見学に連れて行って大学の日本語の授業の雰囲気を経験させるとか、日本語を学ぶ高校生と大学生が合同でするイベントやブログ、スカイプなどを使った交流の機会を作るなどの努力が必要である。大学側も言語習得だけではなく、広く社会文化能力を育成するためのカリキュラム改革にそろそろ乗り出す時期ではないだろうか。また、過去四年間、ジョイントの学会を持ってアーティキュレーションの促進に努めてきたが、それを更に一歩進めるためにも、中等教育側と大学側の先生方が合同

で新しい教育理念や教授法のワークショップを行ったり、合同で教材開発プロジェクトの機会を持ったりすることが望ましい。